

家と家族

——思い出は何のためにあるのか

前編

佐藤浩司
さとうこうじ

(建築人類学・建築史学、国立民族学博物館)

インターネットやユビキタスといったテクノロジーの登場により人間関係のありかたにも大きな変化が起り始めている。家とそこには住む人が建築人類学という独自の視点で研究し続ける佐藤浩司氏を訪ね、その研究から見えてきたものについて語つてもらつた。

聞き手
田村和彦
たむらかずひこ

(関西学院大学教授・関西学院大学出版会編集長)

田村 佐藤さんの活動のコンセプトは、建築と人類学や民族学をつなげていくというものですよね。

佐藤 家は人間社会を見た上で建てていくべきものだと思いますが、今の建築学はそういう環境はない。工学的な数字が先行して僕らが住んでる環境とは全く別に家ができるしまう。建築の原点を知らうと思つたら調査をするしかなかつたんです。日本の民家はすでに修復が終わつて管理されて残っている状態です。そこでフィリピンやインドネシアの調査をしました。そうした民族建築のような環境に行けば今でも村の人たちが維持している家があるのではないかと。家が生きていくことの証であるような社会を見たくて、夢を追つてインドネシアに行つたのです。面白い家はいっぱいありました。

けれどインドネシアの人 자체はもつと現

田村 伝統的な家屋の住みにくさという

ものもありますしね。

佐藤 そうした立派な家が残されている環境というのは生きる目的がとても明確であり居心地が良いんです。結婚して子供を産んで、自分が死んだら子供たちが跡取りになつて自分の靈を守つてくれる。そういう形で祖先の靈を家の中で守つてきたからこそ、あのような家が維持できた。すると幸せでない人も明確にいるんですね。結婚できなかつた人とか、男の子どもができなかつた人とか。

田村 輪の中に入れなかつた人たち。

佐藤 そういう人たち一般の大人と認めてくれない。はたしてそれは我々の望んでいる社会かというと、それは思えなかつた。それでちょっとシフトしていくましよね。

[近代社会の移動性]

田村 佐藤さんの一貫した関心は「移動の家」にあるようですが。

佐藤 戦後の日本の教育では農村社会を

日本人の原点にしてきました。しかし今の都市生活では家を持つてもそこにずっと子孫住み続けられるという環境はない。インドネシアの家は農耕民の家だから一つところに住んで立派な家を維持していく。そういう社会に疑問を感じていて、伝統的な家の調査をしていても先が見えないと思っていたとき、ボルネオで狩猟採集民の調査をしたんです。

田村 佐藤さんの調査をしていて

彼らの家の中には祖先や魂魄のいる場所

【ブリコラージュの社會】

がない。禁忌の空間が全くありませんでした。しかし彼らは家の中では子供を産まないし、家の中では死ぬとその家を捨てて逃げてしまつたりする。あつてはならない、自分が理解できないことが家の中で起きるということを認めていないと思いました。それは実は我々の現代社会とそつくりなんです。家中に禁忌の空間はないし、僕らは自分の家で生まれて自分の家で死にたいと思ってはいるけれど、実際は病院で生まれて病院で死ぬ人が95%以上です。我々が今住んでいる家とボルネオの狩猟採集民の家はとても近いことに気がついた。百年住宅といつて日本の住宅を日本の古い農家や民家のような形にしようという動きがありますが、建物としては百年残るでしょうか

れない。百年住宅をつくるなら住宅を流通させるとか世代交代するといったことを考へなくては。僕は家の中で濃密な人間関係があると思いますが、それがいつがつても余所の世界とはるかにつながつてゐるんじやないか。今はネット社会で携帯電話もあって、ひとつの家に住んでいても余所の世界とはるかにつながつてゐるのに、そこに共同体的なものを求めていくとそれはストレスにしかならない。そうではないルーズな社会を目指そうと思つてゐるんです。

佐藤 佐藤さんの調査をしていても先が見えないと思っていたとき、ボルネオで狩猟採集民の調査をしたんです。彼らの家の中には祖先や魂魄のいる場所※二〇〇五年に国立民族学博物館で行われた特別展。会場内に家をつくり、各空間にアーティスト、路上生活者、知的障害者らが制作した作品を展示了した。

佐藤 去年みんなで「きのうよりワクワクしてきた。ブリコラージュ・アート・ナウ・日常の冒險者たち」(青幻舎)。本展の図録は『ブリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒險者たち』(青幻舎)。

代的な家に住みたい、伝統的な家には住みたくないと思っていたんです。日本にはそういう伝統的なものはないと思って調査を行つたんですが、日本の家はいかに現代的でも木造で、高床で、床材は草だし、壁は土で、扉は紙でつくられています。日本のほうがはるかに伝統を現代に生かしているのではないかと思えてきました。

会をしました。ブリコラージュ・アートという言葉の中には、ある理想の社会を目指してそれにそぐわない人はリストラされたり落ちこぼれたりするのではなく、必ずどういう人がいるのかを考えその人たちが集まつて社会のイメージを考えましょう」ということが込められています。ブリコラージュって本当はモノのことだけではなく人間とか社会にこそ求められるのではないかと思います。

田村 近代社会がもつ移動性や、個がバラバラに生き始めてしまつたことはもう戻りきれない動きなのでしょうか。

佐藤 携帯電話で四六時中コンタクトがとれるような今の中社会では、人間同士がつながれる可能性はかつてよりも強くなっています。問題はそれに空間的な限定期がないことです。同じ空間にいるから親密だとはいえない。空間と親密さとのパラレルな関係がくずれてきている。僕らは肉体を抱えて生きているか

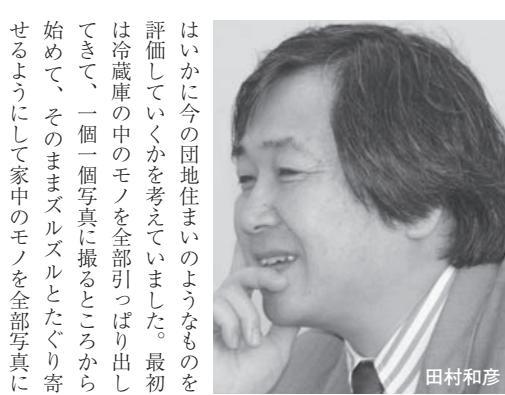
ら同じ空間というのは否定できないけれど、それなら同じ空間の中であまり濃密でなくルーズな人間関係をいかに築いていくか、いかに疎遠な人間関係を築いていくかを考えいかないと、同じ空間の中で暮らせなくなる。

田村 家や家族が一種の神話づくりに荷担しているところがありますね。どう生きなければならないか、器のほうから要求して「こういうライフスタイルはいかがですか」って提案する。

佐藤 住宅も家族もイデオロギーだと思っているから、それに縛られていくと生きづらくなってしまう。本当のところは家族でも住宅でも生きる糧であるべきだと僕は思うけれども、そのためにはルーズかつていうことを、逆に言つているわけ。

【モノと記憶】

佐藤 「2002年ソウルスタイル」展※で



田村和彦



佐藤浩司

調査して結論として均質な社会をイメージしてしまうと、それはどこか違うものになると思つたから、そうならない手法を見いだすためにモノにいったのです。大量生産されたモノは品質でいえばみな同じですが、それを同じと言つてしまわない方法といつたらその個々のモノに込めた個人の思いということになつてくる。それをやらない限り人間の個性はでこないと思つていたんです。同じ鉛筆でも文房具屋の店先にある鉛筆と、自分の筆箱にある鉛筆と、友達の筆箱にある

鉛筆とでは「違うんですよ」と言う感じで、それはどこか違うものになるからひとつ始まると思うから。家も長く住んでいれば自分の歴史を込めているのだから自分にとつては大切なモノであるべきです。ところがある人にとつての価値は他の人にとつてはゼロどころかマイナスだから、十年たつたら家の物理的な価値は下がつてしまふ。でもそれは認めたくなかつた。認めてしまうということは個人が生きている存在を認めないことだから。農家でも骨董品でも時間が経過すればするほどそれが価値に転じにくわけでしょう。しかし我々が持つてゐる家や大量生産されたモノでは資産価値が減つていく。そこに釘をささないと個人の人生が救えないとthoughtから、あえて「2002年ソウルスタイル」では本当にガラクタみたいなモノでも全部調査してそれへの思いをとらえていつたんです。そして聞き取りをしていくと価値がないと思っていたモノまでも価値が

あるように思えてくるんですね。それをもっとと一般的に認知されるような形で、その価値を言つていこうというのが、今まで自分にとつては大切なモノであるべきです。ところがある人にとつての価値は他の人にとつてはゼロどころかマイナスだから、十年たつたら家の物理的な価値は下がつてしまふ。でもそれは認めたくなかつた。認めてしまうということももう何もいらぬという状態でしよう? こうとしているのです。

田村 今の日本の住宅の中のモノの溢れかたも、完全にピーケに達してしまつて、生きしていく意味をその中に見いだしていきます。生きしていく意味をその中に見いだしていきます。

佐藤 でも買うのは、何故か。それは自分が生き甲斐のためとか、生きていく証とか、きっと何かあるんだろうと思う。

【世界の家】(TOTO出版)という本があります。家具を全部出して写真に撮つて、日本が最後に登場しますが、圧倒的な数のモノで量が多い。日本はほとんどない数のモノに囲まれて暮らして、それが全部情報だと思つたら実はすごい情報の網の中に我々は住んでいるんだなあ、と思いますよ。